

万葉の川心

河を詠める

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

(巻第七 一一〇三番歌)

今しくは見めやと思ひし み吉野の大川淀を今日みつるかも

「この夏は、川に入ろう。」そう決めていた。ジェットコースターが大好きな息子は小学一年生。冒険に飢えている。でも、それ以上に自分が川に入りたかった。いつも川を訪ねて旅をするが、当然のごとく上から眺めるだけのことが多い。見ているのだが、どこか本当に見たことにならない気がしていた。思い切り川に飛び込んで、もつと全身で川を感じたいという思いがずっとずっとたまっていた。そろそろ限界。とはいえ、万葉の昔から「川の瀬も知らずに川に入るのは無謀なこと」という教えがある。そこで、「カヤック」という細長い舟を漕ぐ講習に参加して、インストラクターに見守られつつ川を感じることにした。

奈良県五條市を流れる吉野川。それほど冷たくなく、流れも緩やかだ。大川淀と歌われるのもよく分かる。まさにゆつたりとして、そこにはおだやかな時間が流れている。フローティングベストと呼ばれるライフジャケットを身につけ、漕ぎ方・進み方・止まり方を聞くとすぐに川に入った。初心者向けのカヤックは安定していて、こける心配はほとんどない。ひと漕ぎですうっと川面を滑っていく。視線が低いので、大自然の中にすっぽり包まれたような贅沢な空間だった。川上へ向かって果敢に進んでいく・・・つもりになっているが、実際は湖のように穏やか。周りには家族がいる。しかし、こち



らも初心者なので面倒は見られない。母親役も妻役も捨て、一人の漕ぎ人となって進んでいく。途中、岩と岩の間で流れが少し速くなっているところがあつた。「初心者ではなかなか越えられません。でも、挑戦してください。」インストラクターの言葉に俄然闘志がわく。絶対越えてみせる。漕いで漕いで、漕いで漕いで、もう少し、負けるものか、もう一息、まだいける、もうちょっと、何を、大丈夫、漕いで、がんばれ、ダアッ。結果は惨敗。漕ぐのをあきらめたたん、カヤックごと川下へサーッと追いやられた。鯉の滝上りならぬ、ヒトの川上りは再三のチャレンジもむなしく、一度も越えられず情けない結果に終わった。気持ちの良い負けだった。鮭はいつたいどんな壮絶な旅をして上るのだろうか。・・・そうして半日が過ぎた。今日は頭の中を空にして、川を全身で感じられた。川の神様に新たな楽しさを教えてもらったような気がした。

写真の碑は、奈良県吉野郡大淀町の鈴ヶ森行者堂にある。「今のようではどうして見られようと思つていたみ吉野の大きな川淀を、今日こそ見たことだ。」どうしても行つてみたい場所に、今日こそ来られた、今日こそ見られた。これが思い描いていた場所、これがその風景。旅人の歌にしたくなる思ひは、石に刻んで心に刻んで、時代を経て語り継がれている。

ふと見ると、娘はカヤックを下りて好きに泳いでいる。夫は、あの急流に挑んでいる。すぐに音を上げるだろうとふんでいた息子も、オールを放さずひたすら漕ぎ続けている。皆それぞれの楽しみ方で川を感じていた。川はふとこころが深い。そして、さまざまな魅力に満ちている。また見たい、川を全身で感じたい。次は、数日後の激しい筋肉痛を配慮しよう・・・と思いつつ。